

## 弔 辞

日本宗教学会会長 田 丸 徳 善

謹んで柳川啓一教授のご霊前に弔辞を捧げるにあたり、何よりも心残りに思われますことは、余りにも早くこのような形でお別れをしなければならぬということでもあります。すでに数年前、教授は蜘蛛膜下出血の発作に見舞われ、一度は生死の境をさまよわれつつも、驚異的な生命力によってその危機から回復され、研究にまた教育に、以前と変わらぬ情熱を注いでこられました。そのことを知る私どもは、昨年末いらいのご発病に際しても、再び同じ奇蹟が起こることをひそかに願い、また期待してやみませんでした。しかしながら、運命の非情さはその期待を無残にも打ち砕き、私どもの切なる願いをかなえてはくれなかったのです。

柳川教授は、第二次大戦もようやく終わろうとする昭和19年10月、東京帝国大学文学部宗教学宗教学史学科に入学され、23年3月に同学科を卒業されました。ついで大学院に進まれ、23年4月から27年3月にわたって、特別研究生として研鑽をかさねられました。この時期は、わが国社会の全体にとってと同じく、私どもの宗教学にとっても、いわば一つの転換と再出発の時期に当たっておりました。この分野の創始者ともいべき姉崎正治先生をはじめ、多くのすぐれた先学が、相次いで世を去られたことも一つの理由であります、また

他方、海外との学術的な交流の門戸がふたたび開かれ始めた影響も少なくありませんでした。

この時期に東京大学宗教学研究室の中心となられたのは、教授の恩師にあたる岸本英夫先生であります。先生は海外、とくにアメリカで発展をとげた人文・社会科学の方法を摂取し、科学としての宗教学の再構築をはかるとともに、またわが国固有の宗教文化への関心をもち続けておられました。柳川教授はこの師の指導のもと、一方では海外の新しい宗教理論を精力的に消化しつつ、とくにわが国の伝統的社会に行なわれている宗教生活の実態を、調査の方法によって明らかにしようとされました。例えば能登地方、あるいは東北地方の山岳信仰の組織である「講」を扱った初期の数篇の論文は、すでにこのような学風をよく示しております。その扱われた個々のテーマには、時とともに多少の推移もあったように見うけられますが、共同体的な宗教への関心と独特な調査の方法とは、ほぼ終生一貫して変わらなかったように思われます。

昭和35年4月、師の岸本先生に囑望され、34才の異例の若さで東京大学助教授に着任された頃の、まさに「新進気鋭」と呼ぶにふさわしいそのご風貌は、今もお記憶に鮮やかであります。いらい26年の長きにわたり、柳川教授は東京大学におい

て教鞭をとり、多くの後進を育てられました。同時にまた、全国の研究者をあつめる日本宗教学会の発展のためにも力を尽されました。すなわち、長年にわたって理事および常務理事として学会の運営に参与されたのみでなく、昭和55年から57年にいたる間は会長の重責を担い、よくそれを果たされました。

その数多いお仕事の中でも特筆すべきは、これに先立ち、教授が実質的に中心となって推進された『宗教学辞典』の編集・刊行であります。多くの専門研究者の協力を要するこの企画の実現は、教授の周到な計画と不屈の実行力によってのみ可能となったのであり、その成果は現在、私どもの貴重な共有財産として残されております。さらに忘れてならないのは、学術の国際交流に果たされた役割であります。とくに昭和53年から54年にかけて、専門とされる宗教社会学の分野での、世界の

一線級の学者を招いて開催された国際宗教社会学会の研究集会は、海外にわが国の研究状況をつぶさに知らしめると同時に、国内の学会にも新鮮な刺激をもたらし、今日までつづく活発な交流の契機となったのであります。

このように見ますならば、柳川教授の学界への貢献はまことに広く、かつ大きなものであります。そしてそれだけに、このすぐれた一人の指導者を失った私どもの悲しみと損失は、到底、言葉では尽くすことができません。すでに戦後、半世紀ちかくを経て、学界を取り巻く状況も大きく変わろうとしている今こそ、教授の示された鋭い観察と深い洞察とは、かけがえのない指針となった筈であります。ここに、残された私どもは、その遺志を体し、一層、斯学の発展に力を致すことを誓い、弔辞といたします。

平成2年4月5日